



営農情報

第51号 平成28年9月 1日

「あまおう」9月の管理

南筑後普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

☆10月初旬で、最大葉（縦）9cm程度の生育を目安に

【今後の管理のポイント】

- ・花芽分化確認後の適期定植
- ・2番花房分化促進のための寒冷紗被覆(早期作型)
- ・ハダニ類対策

梅雨時期には多雨(図1)の影響で一部根傷みが見られ、苗の充実不足が目立ちました。8月には天気が回復し、苗質も徐々に改善されましたが、梅雨時期の生育遅れの影響で例年よりやや小ぶりの苗の仕上がりとなっています。

今後も高温傾向で推移するという予報が出されています(図2)。普通ポットは窒素欠乏や花芽分化の遅れが懸念されますので、定期的な液肥の追肥と寒冷紗被覆を行って下さい。

病害虫では、梅雨明け以降の高温乾燥により、「アブラムシ類」や「ハダニ類」の発生が見受けられます。また、「炭そ病」も散見されます。病害虫を本ぽに持ち込まないように、発病株の早期発見・早期除去並びに防除の徹底に努めて下さい。

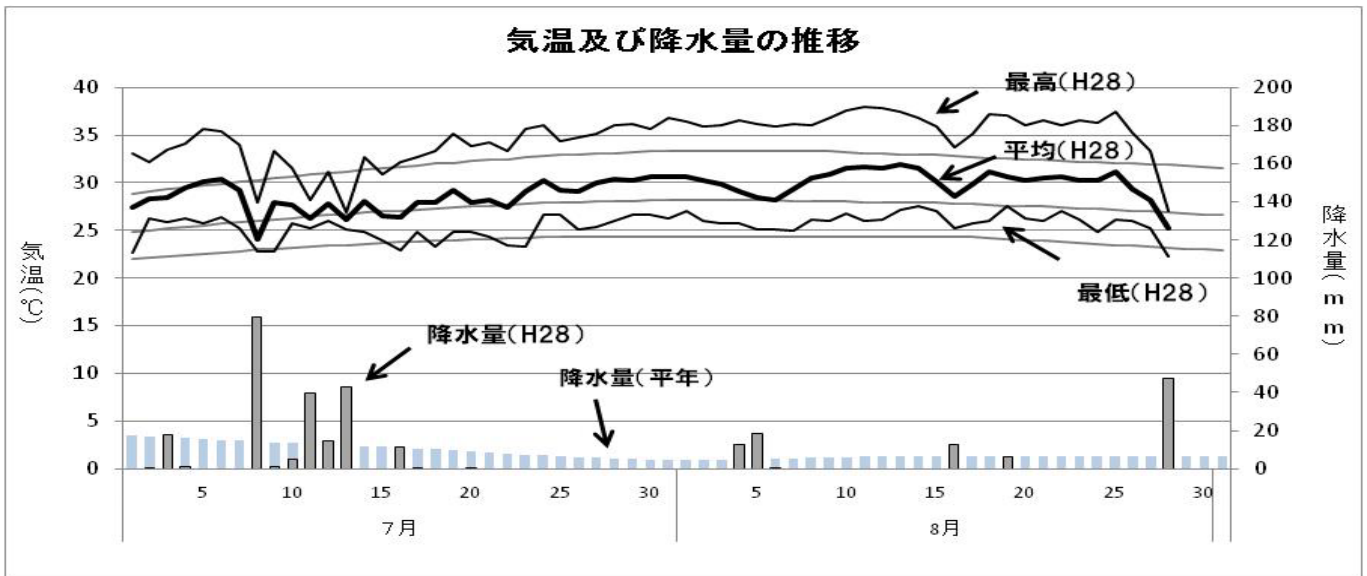


図1. 7～8月の最高・平均・最低気温と日照時間(アメダスデータ久留米)

※平成28年データは8月28日まで

凡例 ■ 低い(少ない) ■ 平年並み ■ 高い(多い)

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

気温



降水量



日照時間



図2. 向こう1か月の気象予報(平成28年8月25日福岡管区气象台発表)

○育苗管理(普通ポット)

- ▶ 体内窒素が切れているところがあります。定植前に草勢が落ち込むと早進株の発生が多くなりやすいので、生育状況を見ながら、既に肥料が切れているほ場では液肥等で追肥を行う。
- ▶ 根張りが悪い(根傷み・根量不足)場合は、回復するまで葉面散布(OKF-1 1,000倍、メリット青500倍など)を2~3回行う。
- ▶ 花芽分化安定のため、8月下旬頃から寒冷紗被覆を行う。

○定植

- ▶ 早い作型ほど高温時の定植になるので、活着促進・根傷み防止のために、定植前に寒冷紗を被覆し地温を下げる。
- ▶ 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- ▶ 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20~23cmを目安にする。
- ▶ 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化ステージ(表1)になってから定植する。早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になり出蕾の不揃いや乱形果の発生及び2番果房の分化の遅れの原因となる。特に、早期作型では厳守する。
- ▶ 深植えは、生育不良になりやすいため注意する。

表1. 定植日と花芽分化程度の見目安

定植日	花芽分化程度
9月10~14日	分化~ <u>ガク片形成</u>
9月15~18日	<u>分化</u> ~ガク片形成
9月19~22日	分化
9月23日~	肥厚後期

○定植後から二番花房対策までの管理

早期作型(株が旺盛になりやすく、2番果房が遅れやすい)

- ▶ 寒冷紗被覆

株づくりのため活着後寒冷紗を一旦剥ぎましょう!

活着促進のため、定植から7日間程度被覆を行う(表2)。活着後は、株づくりのため一旦寒冷紗を剥ぎ、日光に当てる。

9月下旬~10月上旬頃に二番花房分化対策のため、寒冷紗を再被覆する。

寒冷紗被覆の見目安

1回目:定植前から活着まで(7日程度)

2回目:9月下旬頃から二番花房分化確認まで

- ▶ かん水

二番花房対策に向けて徐々にかん水量を減らしましょう!(図3)

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後は、勢いをつけすぎないように徐々にかん水を控える。ただし、極端に乾燥させすぎると生育が遅れるので、土壌水分を見ながら適宜行う。

- ▶ その他

追肥は、2番花房の花芽分化を確認してから行う。

マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

表2. 寒冷紗の種類と遮光率

種類	遮光率
シルバー寒冷紗 109 番	39%程度
黒寒冷紗 600 番	51%程度
黒寒冷紗 610 番	58%程度

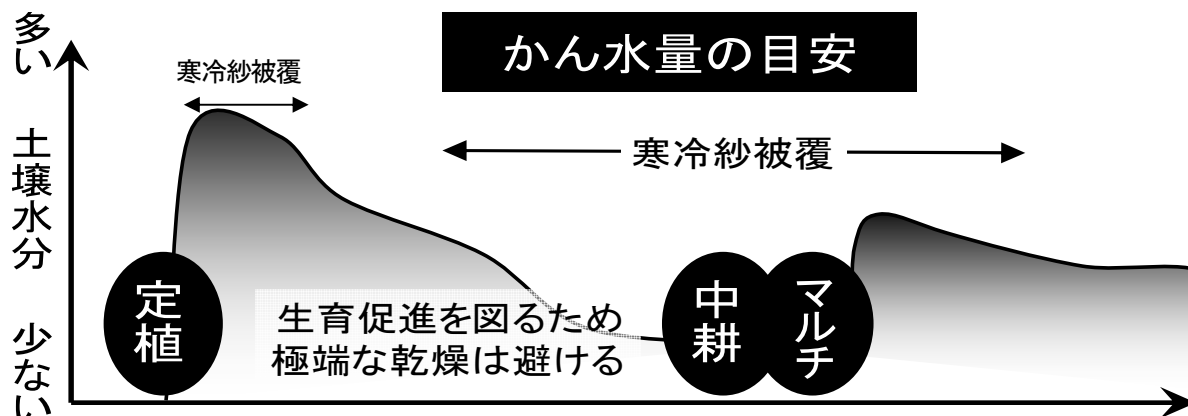


図3. 定植後のかん水管理（早期作型）

普通作型(2番果房が続きやすい)

充分なかん水等により生育促進に努め、二番花房対策は行わない！

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。

活着後はかん水制限や寒冷紗被覆による生育制限は行わない。

活着不良などで生育が悪い場合、葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めることなどで生育促進に努める。

○病害虫防除

害虫は発生初期の防除、病害は発生前の予防散布が重要である。

定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始める。

●炭そ病

- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるので、絶対に使用しない。
- 育苗時に発生が認められた為、定植後も定期的な予防散布を徹底する。

●うどんこ病

- 定植後からビニル被覆まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなる。寒冷紗を被覆した場合は、軟弱徒長しやすくなるため注意する。

●アブラムシ

- ほ場周辺の雑草を除去する。
- 発生初期からの防除を徹底する。

●ハスモンヨトウ・オオタバコガ

- 発生初期の若齢幼虫時（体長1cm程度まで）の防除が重要である。
- 大豆畑周辺のほ場では、周辺からの飛込みが多いので注意する。

● ハダニ類

- 高温（25～30℃）ほど増殖力が高い。
- ナミハダニはイチゴ苗上で生活する（ほ場周辺からの侵入はほとんど無い）。
葉数が多くなれば薬剤がかかりにくくなるため、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後は、しっかりと防除する。
- 天敵のミヤコカブリダニ・チリカブリダニを使用する場合は、天敵に影響が長い農薬の使用を避ける。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！

特集

農作業 慣れと油断が事故を招く

～モベントフロアブル灌注処理と天敵放飼を組み合わせたハダニ類防除～

本年は、育苗期にハダニ類が多発しており、本ぼでの多発が懸念されます。天敵により効果的にハダニ類を防除できますが、天敵利用では、育苗期からのハダニ類持込みを減らすことが重要で、モベントフロアブルは下図のように育苗期後半の灌注処理によりナミハダニに対して長期に渡り高い防除効果が期待できます（図4）。モベントフロアブルとカブリダニ類を組み合わせると、本ぼ期のハダニ類を効果的に防除できると考えられます（表3）。

ただし、灌注処理によるカブリダニ類・マルハナバチに対する影響は45日程度であるため注意する必要があります。

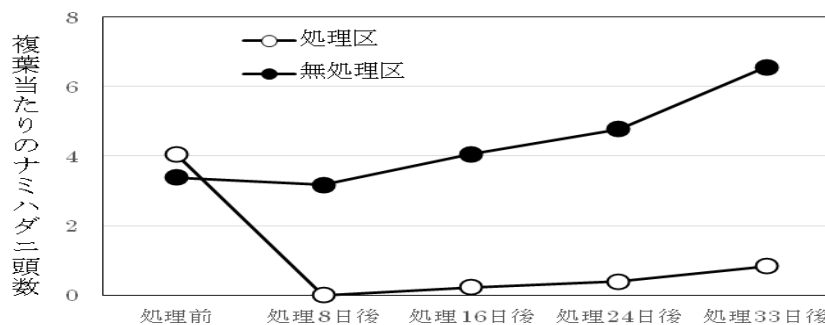


図4. モベントフロアブル灌注処理によるナミハダニの防除効果（福岡県農林業総合試験場病害虫部）
注）平成27年9月28日（定植3日前）にモベントフロアブル500倍・50ml/株を灌注処理した。

表3. モベントフロアブルを用いた防除体系

月	旬	作業	防除対策
9月	上旬		モベントフロアブル灌注処理 本ぼへの持ち込みを防ぐ ※ただし、カブリダニ類に45日間影響するため、9月上旬までには処理する。
	中旬	定植	
	下旬		
10月	上旬		45日間 農薬により適宜防除
	中旬	マルチ被覆	
	下旬	ビニル被覆	
11月	上旬		天敵導入 本ぼでの増殖を防ぐ
	中旬		
	下旬		